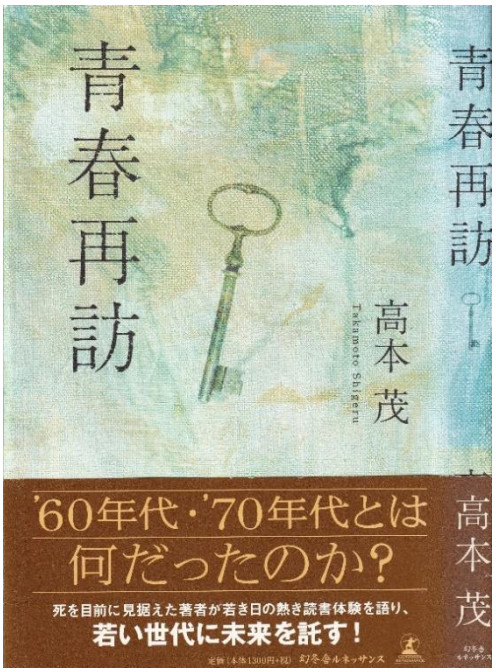
豊庄だより

第 696 号 2022 年 1 月 24 日

福岡市早良区南庄２－２６－１３
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長　西尾　達

「60年代、70年代とは何だったのか？」と問われても、「それ何？」と思われる方が多いかもしれません。「1960 年代、1970 年代」のことを指すのですが、高本茂さんの著書『青春再訪』（幻冬舎ルネッサンス）の帯に書かれていた言葉です。



本の著者である「高本茂」という人について、これまで全く知りませんでした。もう 1 年くらい経つでしょうか、天神にあった大きな本屋 J 店が、天神ビックバンとかいう「開発」によって入っていたビルが壊されることになり、閉店することになりました。移転先は天神西通りという人通りの多いところに決まっていたのですが、そこは面積が狭く、それまで並べてあった本をこれまで通りに並べるのは無理だったのでしょう、半額、本によっては 8 割引きと、本屋でここまでするのかと思うくらいの破格の値段で、在庫一掃処分セールをしていました。

『青春再訪』は、その時見つけた 1 冊でした。1960 年代は私が大学に入る前でしたが、1970 年代は、ほぼ一致。魅力を感じ、購入しました。しかし、その後長い間自宅の本棚でお休みしていました。本棚を見るたびにタイトルが気になり、時々眺めていたのですが、今年の正月、ようやく読み始めることにしました。

『青春再訪』は、「60 歳を過ぎた頃から、自分の死をはっきり意識するようになった。」という書き出しにちょっと戸惑いました。著者は何歳？と思い、本の終わりの「著者紹介」を見ましたが、何年生まれかは書かれてなく調べることにしました。1947 年ということが分かり、私もあと 7 年たつとそんな気持ちになるのかなあという気持ちになりました。話を本の話題に戻します。そうしたわけで、著者は、親しい友人たちに月 1 本のペースでこの世に言い残したいことを送り、5 本書き上げた時点で、それらを本にしたくなり、出版に至ったと述べています。自分が青春時代を過ごした 1960 年代から 1970 年代がどんな時代であったのかを若い世代に知ってもらいたかったということでした。

さて、その内容はと言えば、5 冊の本の紹介でした。順に、『青春の墓標』、『さすらいの青春』、『新約聖書』、『ベートーヴェンの生涯』、『日本沈没』。『日本沈没』は、映画を見ただけで、読んだのは、『青春の墓標』と『ベートーヴェンの生涯』の 2 冊です。『青春の墓標』は、副題に「ある学生運動家の愛と死」とあるように、1960 年代の学生運動が舞台です。著者の奥浩平は 21 歳で自死、その後遺稿集として出版されました。かなり過激な運動が出てきますが、彼は、とにかくよく本を読み、それを論文にまとめて残していました。『青春再訪』には、『二十歳の原点』の高野悦子さんのことも登場しています。『ベートーヴェンの生涯』は、ロマン・ロランの作品です。高木さんは、ベートーヴェンの交響曲、ピアノソナタ、弦楽四重奏曲について、その魅力を書いています。さらに、ロマン・ロランの 2 大長編、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』にも触れています。私は、この二つの作品を学生時代から読まなければならない本としてリストにしていたのですが、未だ読了できていません。高木さんは、何カ月もかけて読んだと『青春再訪』で書いているのに接し、「今からでも遅くない」という気持ちになりました。最後に『さすらいの青春』。この本は現在絶版中です。ネットで検索すると中古で出ていました。私はよほどのことがない限り、ネット販売には手を出したくないと思っていまして、どうするか迷っています。

60 年代、70 年代には、熱い思いをぶつけ合う空気があったのです。私は、少し遅れてこの時代を過ごしたせいか、そうした先輩たちの息吹を半分だけしか吸収できませんでした。今回紹介した『青春再訪』は、わたしより少し早く学生時代を送り、その後も熱い思いを持ち続け、それらを綴った好著です。